

大学生における自立についての意識と現状

発表者：仲上 寛紀

指導教員：中間 玲子

【研究動機と問題の所在】

「自立」というのは、いつの時代でも取り上げられるテーマの一つである。特に、青年期発達を考える上で、自立というのはその最終段階にあたり、自立することで人は大人へと成長していく。そこで、現在の若者（特に大学生）が自立するにはどうしたらよいのか、自立に向けてどのような手立てが必要なのかを、アンケート調査から結果をまとめ、考察していく事とした。大学生は自立をどのようなものにとらえているのか、また、自立する必要性はあるのかどうかということについても論文中に記している。

【明らかにしたいこと】

この研究を通じて明らかにしたいことは、大きく分けて3つある。

I. 自立している人はどれくらいいるのかを知ること。

→大学生の中で「自立している」思っている人はいったいどれくらいいるのか。また、「自立している」ということは、大学生にとってどれほど重要なのか。

II. 何が自立を決めているのか。

→自分のことを自立していると思う人、自立していないと思う人、それぞれ何がそのようなことを決定しているのかを調査の結果から読み取る。

III. 生活環境によって自立しているかどうかの違いがないのか。

→現在の生活が、そのまま自立しているかどうかを決める原因ではないのかという疑問から、生活環境を調査により明らかにして、生活環境と自立しているかどうかの関係性を見ていく事にした。

【予備調査】

方法：兵庫教育大学学部生 77名を対象として、

質問①あなたは自立していると思いますか。 質問②あなたは自立したいと思いますか。

という質問を YES,NO の2件法で実施し、それぞれについての理由を3つ以上回答してもらった。

結果：質問①、質問②についての結果は、図1、図2以下の通りであった。

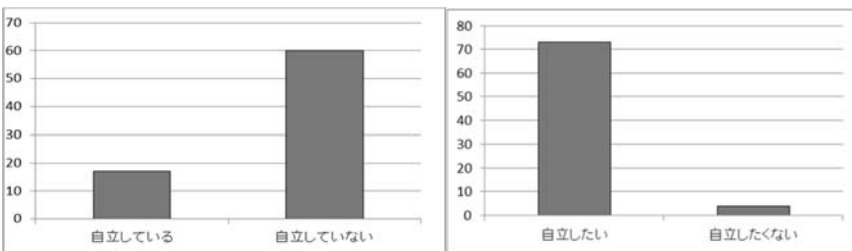


図1 自立しているかどうか

図2 自立したいかどうか

また、それぞれの理由を4つにカテゴリー分け（精神、生活行動、経済、立場）して、結果を示した。（図3、図4、図5）

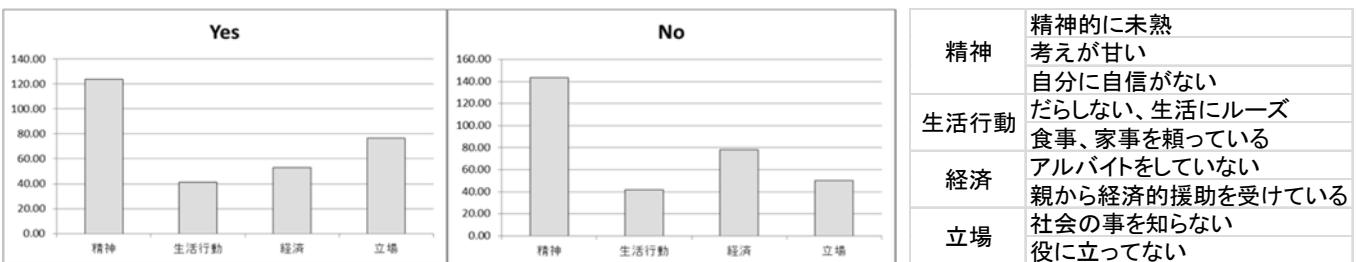


図3 自立していると思う理由

図4 自立していないと思う理由

図5 カテゴリー分け

考察：自立したいと思っている人が9割以上いるにもかかわらず、8割以上の人は現状では自立していないと感

じている。大学生が、自立したくてもできていない現状が明らかになった。また、自立していると思う、自立していないと思う理由のどちらも、精神的な部分で判断している人が多いことが分かった。そして、経済的な面も判断材料の一つになることが分かった。

【本調査】

方法：兵庫教育大学学部生（主に1回生と3回生）計280名に、学年、年齢、性別、自立の程度（他人頼み、意志決定、生活の乱れ、将来の見通し、時間を守らない、生き方、経済）生活環境、自立の指向性（自立忌避、自立圧力）青年期発達について（IPSI,ISRI）の質問を含んだアンケート調査を実施し、回答を分析した。

結果：生活環境によって、自立の程度、自立の指向性が異なるのかを検討した。ここでは、特に注目すべき結果を示す。（図6～図11）

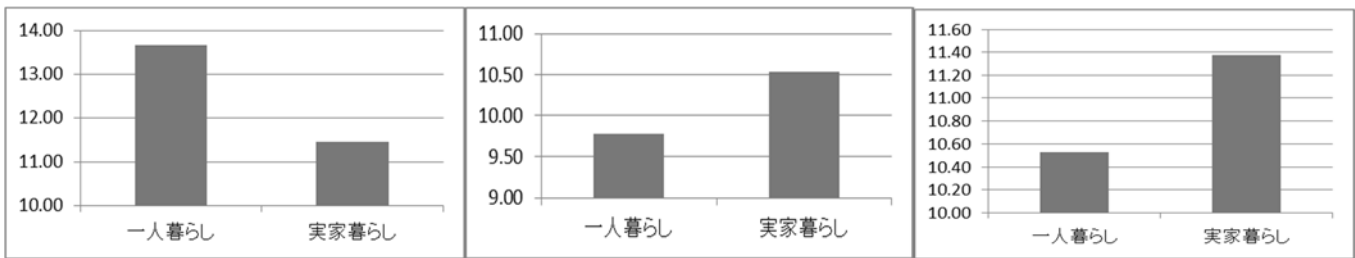


図6 居住環境と生活の乱れ

図7 居住環境と将来の見通し

図8 居住環境と自立圧力

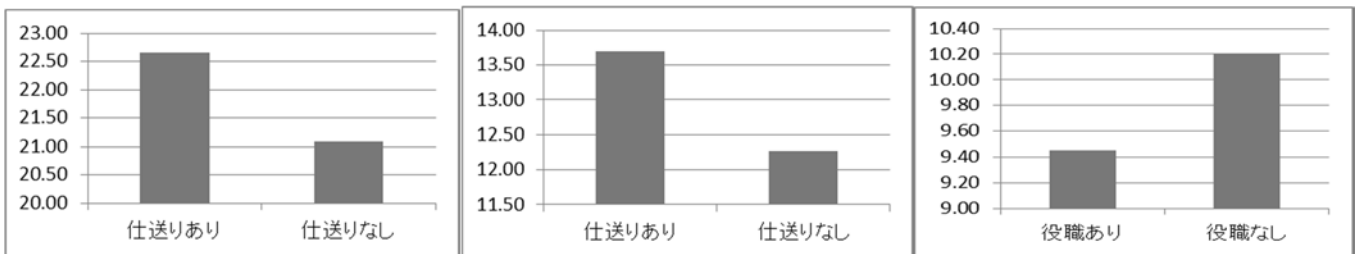


図9 仕送りの有無と他人頼み

図10 仕送りの有無と生活の乱れ

図11 役職の有無と将来の見通し

考察：グラフからわかるように、一人暮らしは実家暮らしに比べて生活が乱れており、将来の見通しも立っていないことが分かった。また、自立圧力（自立しなければならぬと思っている）は実家暮らしの方が高い傾向にあった。一人暮らしをすると、今の生活に精いっぱいになって、他のことを考える余裕がなくなってしまうのではないだろうか。そして、仕送りをもらっていない人は、仕送りをもらっている人と比べると他人頼みでなく、生活もしっかりしている。やはり、経済的に自立できている人は、そのほかの面でもしっかりしていると言えることが分かった。さらに、役職についていない人の方が役職についている人より将来の見通しがあることが分かった。これは、役職に就くことによりその役割に追われ、自分自身の将来についてしっかりと考えることができていると言える。役職に就くということは、周囲からの信頼も厚いということなので、仕事内容のうち、誰かに任せられるところは任せるなどして、負担を減らすことも必要だと考えられる。自立するということは、責任をすべて自分で抱え込むという意味ではなく、自分にできる事、できない事の判断をしっかりとすることである。

【その他の関連、そして今後に向けて】

グラフに示した結果以外にも、本調査の結果から、生活が乱れは、将来の見通し、生き方、意志決定と負の相関関係にあった。「自立したいけれど自立できていない」という人にとっては、生活の乱れを改善することで、自立に向かう要素が自然と身につく可能性がある。基本的な生活を見直してみると、自立への道が見えてくるのではないだろうか。また、1回生と3回生では自立の程度の差はなかった。普通は3回生の方が自立していると思うが、今回の調査では、入学してから、2年以上経過しても自立に向かっていないという結果が出てしまった。この原因は、いったいどこにあるのか、今後の課題としたい。

【参考文献】

畑野快・杉村和美・中間玲子・溝上慎一・都筑学 (2014) エリクソン心理社会的段階目録(第5段階)12項目版の作成 心理学研究, 85, 482-487 他